HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中・近世アイヌ史の解明に対する漆器分析の可能性
Author(s)	北野, 信彦
Relation	新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Citation	新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書, 186-195
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56296
Type	report
File Information	t3ch6.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 6 章　中・近世アイヌ史の解明に対する漆器分析の可能性

北野　信彦

ただいまご紹介いただいた北野です。本日は「中・近世アイヌ史の解明に対する漆器分析の可能性」というタイトルで話をさせていただきます。ただし、ここまで判った、という話にはなかなかいかないので、実際に中・近世出土漆器を分析すると何がわかるのか、それが中・近世アイヌ史解明にどのように役に立ちそうか、その可能性に重点を置きたいので、ここでは私がこれまで調査した実例をもとに、あくまでもケーススタディーだと思ってお聞きください。

さて、この会にご参加の皆さんは歴史・考古学のご専門の方が多いので、日本の伝統工芸の一つである漆器に関心が高く、漆器椀を日常の食器として使用されている方も比較的多いようです。これを大学の学生さんなど、一般の方などにお聞きしますと、漆器椀を普段使われている方は５０人に２人、3 人いるかどうかというところです。すなわち、なんとなくプラスチック椀の形態がその姿を踏襲しているために漆器のイメージはあるが、実際にはなじみがないというのが今の日本人の本音に近いようです。そこで、ここでは最初に漆器とは何かについて考えてみたいと思います。まず、漆器、これを作成する漆工技術は言うまでもなく、日本を代表する伝統工芸の一つです。今日の話題は、中・近世のアイヌ史ですが、私の研究している分野は近世です。この近世の初頭期、17 世紀の初めころの桃山文化期といわれる時期には漆器のことをジャパン、陶磁器のことをチャイナと呼ばれた時期がありました。これは、日本の漆の歴史は古いこと。さらには漆の黒い艶と蒔絵の金のコントラストが美しいため、日本の工芸品の代表の一つとして海外の方に広くイメージされたとされています。確かに本日の研究会の主題であるアイヌ史においても、「漆器はアイヌ社会では大変好まれた」という話はよく聞きます。この点を踏まえると、「中･近世において日本の漆、漆器を異文化社会がどのように受け入れたか？」という問題がこれを解くカギになります。話を戻しますと、ヨーロッパ社会で漆＝ジャパンと呼称された背景は、鎖国以前の桃山文化期に輸出された南蛮漆器、その後の鎖国下の長崎交易を通じて行われた江戸文化期の輸出漆器。さらには、近代以降にヨーロッパやアメリカに数多く流失した文化財、これらを通じて世界に漆器の存在、特にその美がイメージされたのが現実です。

さて、このような漆器とは何か？漆器は木地に下地を施し、その上に漆塗料を塗り、さらに資料によっては、蒔絵や漆絵の加飾を施します。そのための基本は、まず漆の樹液の回収の問題です。今日では年間消費量の８割以上が中国からの輸入に頼っており、日本産漆は岩手県二戸市浄法寺周辺で作られているものを中心に２割弱です。そして浄法寺漆はどこで使用されているかというと、日光の社寺建造物の塗装修理のためにほとんどが使われています。漆の木の幹を傷つけて漆樹液を回収する漆掻きの図、江戸時代の作業図には鎌で漆掻きしている風景が描かれています。しかし、今日使われている漆掻き用具は越前衆の道具が基本であり、これは

近代以降のものです。すなわち、江戸時代の道具と越前衆の道具は大きく異なります。実際は近世さらにはもっと古い時代には、どのような道具で、どのように漆樹液の回収を行っていたのは、よくわかっていないというのも現実です。

さらに今日の漆を取り巻く現実は、日本産漆のほとんどを生産している岩手県二戸市浄法寺周辺の漆掻き職人さんたちは20名ほどの高齢者の方に頼っています。さらに漆掻き用具造りの鍛冶屋さんに至っては、青森県の田子の中畑さんの工房一軒のみです。この先、日本の漆の生産、日本の文化の中から消えてしまう恐れもあります。

話を戻しますが、漆器生産には、木地、下地、漆塗料、さらには色漆の使用顔料や蒔絵材料には色々な品質があります。私はこの材質・技法を科学分析で解明することが、時々の漆文化の在り方を理解する上で何らかのヒントになると考えます。ここに江戸時代の紀州黒江漆器生産地の絵図があります。この漆器生産地では、木地を木地師から購入して、この工房ではロクロ挽きしてある程度の椀の形を作る。さらに最終の漆器の形に仕上げる。次にこの工房では木地椀を黒く塗る。これは素人目には漆を塗っているように見えるのですが違います。理由は、漆塗料は湿気がなければ乾かない。固化しない。すなわちこの絵のように天日で椀を乾かしているのは、漆ではありません。これは炭粉を柿渋や糊・膠に混ぜて作った下地を木地椀に付け、乾燥させて作業の様子なのです。確かに今日の伝統工芸品としての漆工品の生産では堅牢な漆と粘土鉱物を混ぜて作成するサビ下地が基本ですから、このような炭粉下地はありません。ところが、出土漆器の8割以上はこのような下地のものなのです。その点では、この絵図は日常で使用された漆器生産の状況を良く表現しています。ところが、近世以前の漆器生産の実態はよく分かっていません。唯一古文書として残っているのは、中世段階では、奈良県吉野で漆掻き技術集団が存在したという古文書は存在しますが、それ以外の実態は不明です。先ほど漆掻き用具は変化したという話をしましたが、その一方で形態が変化しないものもあります。『舟木本洛中洛外図屏風』に描かれた寛永年間頃の京都市中の塗師屋には、漆桶や漆漉し布、漆ヘラや漆刷毛、このようなモノが考古学の世界では出土品を調査する上で参考となります。実際、浄法寺の民俗例である漆器生産道具の漆刷毛や漆ヘラとこの絵に描かれた塗師屋の道具類、さらにはこの『舟木本洛中洛外図屏風』の同時期に実際の京都市中から出土した出土資料群は実に形態が良く似ています。

次に、中世の出土漆器の材質・技法に関する分析調査の一例を挙げます。中世漆器を代表する漆器資料群に根来塗と呼ばれる朱漆器があります。漆工史の分野では、根来塗は中世の紀州根来寺内工房で寺院什器として生産されていたが、豊臣秀吉の根来寺焼き打ちにより途絶したという伝承を伝えています。この材質・技法は、木胎のケヤキ材の要所に布着せ補強を行い、その上に堅牢なサビ下地を施す。その上に中塗りの黒漆の上に上塗りの朱顔料を使用した朱漆を塗る、実用性が高い堅牢な寺社什器であるとされます。しかし、実際、（財）和歌山県文化財センターによる根来寺域内の発掘調査では、豊臣秀吉の焼き打ちに伴う火災層と考えられる層から朱漆器が出土しました。まさに漆工史でいう根来塗そのものですが、材質・技法を分析した結果、トチノキに炭粉下地を施し、ベンガラ漆を1層だけ上塗りする簡便な作りの資料も結構多くありました。勿論、正当根来塗といった材質・技法の資料も存在しましたが、実際には多様性があったようです。このような実態を明らかにできる点が考古学と関連諸分野の強みで

しょう。また、山科本願寺が宗門戦争で焼き打ちを受けた際の火災層から、大変丁寧な作りの蒔絵漆器や中国産の輸入品と想定される堆黒漆器の破片資料群が多数出土しました。伝世品ならば十分国宝級の漆器ですが、これらは門主クラスの什器であったと考えられます。堆黒資料の数ミリ角の塗膜片を分析した結果、35 層～ 40 層もの塗り重ねの非常に丁寧な資料であったことがわかりました。当時の本願寺の財力の大きさを実証する物的証拠の一つであり、これも考古学の分野が力を発揮した好例といえそうです。

次に、近世の出土漆器の調査事例についてみていきます。近世、とりわけ江戸時代の出土漆器は江戸や大坂、地方城下町の低湿地の調査を行うと、比較的大量に出土する場合があります。特に東京の汐留では、１万点以上もの漆器が出土しました。私自身が近世出土漆器の調査に関わるようになったきっかけは、これらを保存処理作業が結構難しかったという経験上にあります。出土漆器の保存処理は非常に苦労する。先ほども言及したように､漆器は木胎･下地･漆塗料･さらには蒔絵材料などで構成された複合素材の文化財です。その漆塗料も 100％漆であればいいのですが、特に油分や混和材を大量に混ぜたものもある。実際、今日のプラスチック椀に対応するような廉価な量産品の出土漆器の方が優品より保存処理は難しいです。いずれにしても陶磁器の品質調査は肉眼観察による主観的な要素が大きいのですが、出土漆器の場合は、品質がバラエティーに富むため、材質・技法を分析調査することで客観的に品質ランクの判断が可能です。この点を応用すれば、対象となる漆器の材質・技法の品質や特徴をヒントとして、使用階層の性格や、それが存在した社会背景や物流の在り方などの歴史解明に向けた指標となりうる可能性が秘められていると考えています。

さて、ここからは実際の調査方法についてお話します。まず理化学的な分析調査では、出土資料の場合、条件が許せば破断面などから数ミリ角程度の小破片を採取させていただきます。この貴重な小破片試料から、いかに有益で多くの情報を得るかがポイントです。調査方法の１つは、実体顕微鏡を用いた表面観察、次に生物顕微鏡を用いた樹種同定で、木胎に用いられている木の種類、さらには木のどの部分を利用しているかを確認する木取り方法を調べます。下地の種類や漆の塗り重ねの観察は、数ミリ角の小破片試料を立てて合成樹脂に埋め込み、それを研磨して金属顕微鏡を用いて断面構造の観察を行います。また、蛍光Ｘ線分析装置を用いて、たとえば赤色系漆の使用顔料が朱なのかベンガラなのか、蒔絵材料が金なのか、銀なのか。このような方法で、個々の漆器の材質・技法面からみた品質差を客観的に調査することが可能なのです。また、最新の分析方法として、次のコメンテーターである本多先生がご専門ですが、PY-GC/MS 分析装置を用いて漆塗膜を分析すると、さらに多くの歴史的な情報を描き出すことができます。

これ以外でも、我々は当然調べなければならない調査方法があります。それは、本日ご参集の皆さんたちの専門分野でもある文献史料・民具資料・考古資料、さらには民族調査により歴史的背景を押さえておくことは極めて重要なことです。私が専門とする文化財科学の分野は、つい理系の分野と思われがちですが、実際は文系の情報と理系の分析データを掛け合わせて、初めていろいろな情報が見えてくるのが現実です。そうでないと、分析結果だけで画期的な物を言うととんでもない間違いを犯す危険性があるのです。ただし比較的情報量が古代より多い近世ですが、注意しなければならない点もあります。たとえば現代の伝統工芸の漆器生産地の

材質・技法をダイレクトに考古資料のそれを理解する上で援用する場合があります。しかし、歴史的事実では、今日の漆器生産地の多くは江戸時代中期～幕末期以降の生産地であり、中世・近世初頭、さらにはアイヌ漆器とは直接系譜は繋がりません。ヒントはあるかもしれませんが注意が必要です。それでも、わずか数ミリ角の剥落小破片試料の塗膜断面観察を行うだけでも、肉眼観察では同じ黒漆のかけらと言っても、炭粉下地の上に薄い漆を一層だけ塗った漆器と、粘土鉱物を生漆に混ぜた堅牢なサビ下地の上に漆を多層塗り重ねた漆器の分類は可能です。またアイヌ漆器にも多くみられる蒔絵も材質・技法は時代により変化します。中世以前までは、蒔絵漆器は一部の極めてハイクラスの特権階級、貴族や大名、有力寺社の人々の什器でした。それが、比較的所有する階層が少し広がる契機は、桃山文化期の高台寺蒔絵の登場です。それでも生活什器としては丁寧な作りです。江戸時代前期以降になると、アイヌ漆器でも時々みられる南部箔椀が登場します。私が調査したところ、この漆器は、炭粉下地に上塗り漆が一層という簡便な塗り技法ですが、金箔を用いながらも代用金蒔絵粉の石黄顔料を使用し、ほとんどがブナ材である特徴があります。ブナ材は東北産漆器の特徴の一つであり、金箔使用は奢侈禁止令による規制の対象となる。石黄顔料は東南アジア交易で日本に輸入されていたため、当然、寛永 39 年の鎖国令以降は入りにくくなる。漆器生産と当時の政治・経済・流通を考えると参考となる出土資料群です。

江戸時代中期は銀蒔絵粉、江戸後期から幕末になるとスズ蒔絵粉、明治以降になると真鍮蒔絵粉が登場します。また、緑色漆が登場するのも江戸時代後期以降です。これは漆をインディゴ（藍）の青色粉と、江戸時代前期では鉱物を擂り潰した天然顔料であった石黄が、蘭学の関係で人造石黄の生産が可能となったため、この石黄（黄色粉）＋藍（青色粉）で緑色漆を作る技術開発により初めて可能となりました。いずれにしても近世出土漆器の場合、地道な話ですがこれまの調査の結果、材質・技法によって、たとえば金蒔絵漆器とスズ蒔絵漆器では 100 倍ぐらい値段が違うので、今のイメージでは 100 円ショップで購入したプラスチック椀と 1 万円の本当の漆塗りの椀が併存していたことになります。そのため、出土漆器の品質組成に関する分析調査結果は、考古学的な出土状況、所有者や遺構の性格を理解する上での代弁者とすることに意味があることと考えるわけです。

以上の点を踏まえて、中・近世のアイヌ社会と和製漆器との関係を考えるヒントとなる「異文化社会に受容された和製漆器」のケーススタディーもしくはモデルケースとして、冒頭にお話しした 17 世紀前期頃にヨーロッパで呼称された陶磁器＝チャイナの対比語として引用される漆器＝ジャパンの世界を検証します。確かにイメージとして日本列島には縄文時代以降の長い漆器の歴史と伝統がある、そして漆器は日本を代表する伝統工芸品であるという黒漆の艶と金蒔絵に代表される高い技術水準、もう 1 つは日本産漆の品質のよさがこの理由とされてきました。この背景としては、鎖国以前の桃山文化期には南蛮漆器、鎖国以降の江戸文化期には長崎交易で輸出された輸出漆器があり、これらを通じてヨーロッパでは和製漆器の評価が高かったようです。その一方で、この小シンポジウムの主題であるアイヌ社会が存在した北方について。北海道（蝦夷地）その北方にはサハリン（樺太）～アムール川中･下流域の極東地域が存在します。ロシアの民族土産には黒と金・赤でカラフルにラッカー塗装された椀・盆・匙などの食器があります。私には蒔絵漆器をモチーフにしたようにも思えますし、実際、アムール川の中・下流

域には少数民族の集落とアイヌの人々との交流を示すアイヌ漆器も確かに存在しており、漆器は流通、人々の交流を示す物的証拠の一つであることは確かなようです。

近世の漆器生産の状況、一例ではありますが木胎に使用される樹種の在り方を検証すると、中世末の戦国期から桃山文化期の漆器の樹種はかなり多様性があります。これが、江戸時代の中期～後期になると最優材のケヤキ・良材のトチノキ・一般材のブナの３種類に集約される。この背景には木地を作成する木地師集団の動きと非常に密接に関連するようです。木地師集団も中世～近世初頭期の桃山文化期頃までは、それぞれの土地に密着した小規模な地木地集団が、それぞれの地域で利用可能な木地をそれぞれが調達してロクロ挽きして椀の形に作り、周辺地域の塗師集団に渡したようです。江戸時代の幕藩体制が固まった後の各地の木地師集団は、皇室縁の伝承を有する君ケ畑と蛭谷という２系統の近江系木地師集団が全国制覇組していきます。かれらは「氏子狩り」という制度であくまでも宗派的に各地を巡回して地方の木地集団を自分のグループに組み込んでいくとされますが、彼ら関連の古文書をよく読むと、轆轤などの道具や運用資金貸付、さらには漆器生産地とのビジネス橋渡しなど、宗教色よりはむしろ技術・流通などを通じて繋がっていたようです。当然自陣営に地方の木地師集団取り込みが激しくなればトラブルも発生する。江戸時代後期には愛知県奥三河地方の津具村周辺で氏子狩りに絡んだ「津具事件」と呼ばれる事態が発生します。当初郡役所がこのトラブルを納めようとしますが折り合いがつかず、最終的には江戸の寺社奉行差配で収拾した。これなどは、藩主体の社会体制を超えた全国レベルでの社会の繋がりを示す一例です。これと類似した藩を超えた技術者集団の動きは、越前衆の漆掻きの世界にもあったようですが、この点は今後の調査テーマです。

さて、話題を変えます。私たちはこれまでの一般常識で物を考えがちですが、そういった中で「アイヌの人たちは漆器を好む」という話の実態はどうなのか。確かにこの話は、幕末期～近代以降のアイヌ民族史（誌）として、幕末期に描かれた絵画や文献史料に数多く登場します。特にアイヌ伝世漆器ではやや古手にみえる平蒔絵・梨子地加飾の桃山風の蒔絵が多いため、これまで桃山文化期の伝世品が古物として北海道（蝦夷地）に北前船交易でもたらされたのではないか？という意見があります。

この点に関連して、これまでの調査の結果、年代観が江戸時代前期の桃山文化期頃に比定される出土蒔絵漆器の一例として、余市町の入舟遺跡ではアイヌ墓副葬品として、「シロシ」刻印がある高台寺蒔絵椀が一点出土しています。この秋草図様の平蒔絵と梨子地併用の加飾が配置されている高台寺蒔絵は、桃山文化期を代表する漆器で、豊臣政権との関連性が指摘されており、調査の結果、本資料は材質・技法面からも確かに本物の高台寺蒔絵でした。この類例は伝世品にはかなりあるのですが、年代観が確実な出土品は、本資料と以外では豊臣政権との関係が深い宇喜多・小早川氏関連の岡山城の二の丸跡出土品のみです。特に岡山城二の丸跡出土品は、わざわざ破損した箇所を漆継ぎで修復して使用された痕跡が明瞭であり、当時、高台寺蒔絵がいかに貴重であったがわかります。最近、私は豊臣秀吉の肝入で作成されたとの伝承がある京都の醍醐寺三宝院白書院の蒔絵漆床かまちの調査を実施したのですが、この年代観の比定の援用として先ほど述べた２例の出土品の年代観を考慮しました。このことなどは、出土漆器が美術史の分野に大きく貢献した事例の一つといえます。そして、さらに重要な点は、「なぜこのような品がアイヌ墓副葬品として出土したのか？」を考えることが、本日の小シンポジウム

を考える上でも参考となりましょう。ここで注目したいのはやはりアムール川を通じた山丹交易の存在です。私はかつて本シンポジウムを主催しておられる加藤博文先生の現地調査に参加させていただきましたが、確かに現地には中国風の衣装箱と日本の船箪笥が共存し、和製漆器も存在しました。ロシアの民俗例では、極東の少数民族は自然の民というイメージが先行するのですが、アイヌとの文化の交流と共通性を理解する一つの物的証拠として、極東に渡った漆器調査は今後大切であると考えます。次に、関根先生も先ほど触れられましたように、北海道のアイヌ文化には北からの影響とともに、和人地を含む南からの影響が大きかったことは言うまでもありません。さらに、日本の漆文化と異文化との交流を考えるとき、忘れてならないものは先ほども再三申し上げた桃山文化期の南蛮交易・朱印船交易を通じた漆の話です。私自身、これまでは漠然と「南蛮漆器の輸出があった」程度の認識でしたが、この課題に直接関係するきっかけは京都市埋蔵文化財研究所の客員研究員として柳池中学校構内遺跡の調査に携わったことです。この遺跡は、京都市中の中京、押小路通と御池通にはさまれた町屋跡で、寛永年間頃の工房遺構と遺物が多く出土ました。特に注目されたのは、真鍮工房の検出と初期京焼生産関連資料群の出土でした。これらと一括で比較的多くのタイ産四耳壷破片が出土し、なかには漆のような樹脂が固着固化した資料も多く検出されました。幸い調査担当の小檜山さんは、私が漆の調査を進めていることを知っておられたので、すぐ声をかけてくださったことが事の発端です。調査の結果、生漆の原液塗料であることはわかったのですが、さらにもう一歩踏み込んだ分析を行う必要があると考え、私の後で講演される本多さんのおられる明治大学理工学部の宮腰先生に PY-GC/MS 分析をお願いしました。その結果、日本産漆に特徴的なウルシオールではなく、タイ・ビルマ・カンボジアなどの東南アジア産漆塗料と同じピークが検出されたのです。このことは、鎖国前後の寛永期には、京都市中で東南アジア産の輸入漆塗料が使用された可能性があるということです。

この結果を受けて関連資料の調査を行った結果、『南蛮図屏風』には輸入品を詰めたコンテナとしてこの出土品と類似した四耳壷が描かれており、タイのアユタヤ周辺では伝世品として同様の四耳壺を確認できました。さらに、寛永年間頃の『平戸・長崎商館長の日記』は、確かに中国・ベトナム・タイ・カンボジアあたりから平戸・長崎へ年間 50 ～ 100 トンもの大量の漆塗料を輸入したことを記録しています。そして同じ 1 ピコル単位でも、30、20、28、13 という価格差、すなわち品質差が存在したこと、輸入漆塗料は壺単位で取引されていたなどもわかります。柳池中学校構内遺跡出土資料群は、まさにこの物的証拠という感じを受けました。ところがこの調査結果を学会で発表したところ、漆の専門の先生から、「東南アジア産の漆塗料は、日本の気候では乾かないので輸入には向かない。文献史料の漆塗料は、翻訳して「漆」としているので、何か他のものである可能性もある」と指摘されました。それではこの出土四耳壷の存在はどう解釈するかという点については、「おそらく東南アジアで使用された壺のリサイクルではないか。すなわち素焼きの四耳壺に液体を詰めて海路で長時間掛けて輸入すると、中の液体が漏れてしまう危険性がある。今日のホーロー引き容器と同じ感覚で、壺の内部を漆塗料でコーティングされた壺は再利用可能性ではないか」とのことでした。確かに考古学に分野では類例が他にないのでは、水掛け論になります。その後、調査を継続したところ、ほぼ同年代の江戸時代前期頃の漆塗料が内面に付着固化したタイ産四耳壺の破片は、長崎市中の炉粕町遺跡と輸入品

を取り扱っていた商家跡と推定される大坂城下町遺跡町屋跡からも出土していることがわかりました。そして先行担当者の了承得て調査したところ、いずれも生漆の原液塗料でした。さらに、これらを本多さんに分析していただいたところ、京都のそれと同様、タイ・ビルマ・カンボジア周辺漆塗料に特徴的なチチオール成分が検出されました。また、柳池中学校構内遺跡ではベトナム施釉陶器の蓋にも漆塗料の付着がしていましたが、これはチチオールとベトナム産漆塗料に特徴的なラッコールの両方の成分が検出されました。先の『オランダ商館長の日記』では、タイ・カンボジアからの漆塗料の輸入量は結構多いのですが、ベトナムからの輸入量は比較的少ない。そのため、集荷元のベトナムで、すでに出荷量合わせのためにブレンドした可能性もあるかもしれません。いずれにしても、鎖国以前の桃山文化期には南蛮交易以外にも御朱印船交易があり、日本人町はこのような輸入用物資の調達、集荷を扱う商人の前線基地であったと考えられます。『平戸・長崎商館長の日記』は、あくまでもイギリス・オランダの東インド会社関連の内容のみですから、御朱印船交易・日本人町が関係した輸入品も当然あったわけですから、本当に大量の漆塗料が輸入された可能性があると思います。それでは、このような漆塗料を南蛮交易や御朱印船交易で輸入する以上、当然、タイのアユタヤ・カンボジアのアンコール周辺地域・ベトナムのホイヤンなどの日本人町周辺にも漆文化が桃山文化並行期に存在したのではないかという疑問が生まれます。この点に関連して、昨年、まずタイのアユタヤの現地調査を行いました。アユタヤ遺跡は石造やレンガ積の寺院建造物が世界文化遺産として有名なので、「石の文化」のイメージがあります。しかし、実際には、建造物の天井や扉などは木造であり、そこには螺鈿とチチオール成分が特徴的な漆塗料が広く使用されていたことがわかりました。さらには、カンボジアのアンコールワット。これも世界文化遺産として有名な石の文化財なので、よもや漆塗料の使用はないだろうと思ったのですが、17 世紀前期頃のポスト・アンコール期には、それまでのアンコール期やバイヨン期の石仏をリニューアルして漆塗料で金箔を貼る。さらには漆塗料で金箔や螺鈿加飾を行う木彫仏の作成が行われていることが再確認されました。すなわち漆文化は東南アジアにも存在したようです。とりわけ、カンボジアのアプサラ事務所のご協力を得てこれらの調査をした結果、下地に中国の技術である骨粉下地の使用、接着材料として日本の技術である澱粉を生漆に混ぜた麦漆の使用など、技術の交流の一端が確認されました。

それでもこの桃山文化期における輸入漆の問題を考える上で、どうしても解決しなければならない重要な点があります。それは先ほども申し上げた、「日本では本当に輸入漆を使用したのか？」という点です。寛永年間頃の岩佐又兵衛の作とされる舟木本『洛中洛外図屏風』には、まさに、柳池中学構内遺跡が機能していた鎖国直前の京都市中の様子が細かく描かれています。その中には、漆塗師屋職人の作業風景もあり、漆ヘラや漆刷毛、漆塗料を汲溜めた曲物容器や漆漉布で漆を漉す様子など、今とほとんど変わらない漆器作成の状況がわかります。まさにこの絵に相当する漆工用具が幸いなことに柳池中学構内遺跡でも出土していました。当初はちゃんと認識していなかったのですが、報告書刊行が終わった後に出土資料の ABC ランク分類との関係で、多くの木製品の破片を C ランクとして倉庫の奥に収納することになりました。なかなか収納後の C ランク資料の再調査は物理的に困難なので、倉庫に収納される直前にこれら木製品破片の再確認作業を行ったところ、幸いなことに漆刷毛や漆ヘラ、漆蓋紙、漆容器の曲物底板などの存在を確認することができたのです。これらには漆塗料が付着固化していたので、さっ

そく本多さんに分析していただいたところ、いずれもタイ・カンボジア・ビルマなどの東南アジア産漆塗料に特徴的なチチオールの成分が検出されました。このような漆工用具の存在は、実際に当時の京都市中で東南アジア産の漆塗料を使用して何らかの漆器生産が行われていたことを示す物的証拠となります。なお、この遺跡から 300 mほど離れたほど同年代の町屋跡のゴミ穴廃棄遺構からも同じような漆工用具が出土したのですが、こちらはいずれもウルシオールが検出されたので、おそらく国産漆と考えられます。いずれにしても、少なくとも『舟木本洛中洛外図』などに描かれた桃山文化期の京都市中では、タイやカンボジア、ベトナムなどの東南アジア産の輸入漆塗料や国産漆塗料など、さまざまな漆塗料が存在し、時と場所に応じて使い分けられていたのでしょう。

このような東南アジア産の輸入漆塗料が実際に存在した桃山文化期には、こんどはそれとは逆に日本から海外に多くの漆器が輸出されました。南蛮漆器です。業務の一環としてこれらの材質・技法を分析する機会がありました。一点は、年代的にはやや下る 17 世紀末から 18 世紀初頭頃に長崎商館長であったコンスタンチン・ランストの紋章が蒔絵加飾されたアシュモリアン美術館所蔵の皮楯です。この皮楯を私どもの研究所で修理する機会があり、この剥落小破片を数片いただいて分析しましたその結果、銀梨子地を施した漆層からは、国産漆塗料の特徴であるウルシオールではなく、あのチチオールが検出されました。さらに、ドイツのケルン東洋美術館所蔵の洋櫃や平戸市教育委員加所蔵の蒔絵螺鈿箪笥。これらは典型的な南蛮漆器の図様が蒔絵と螺鈿で加飾されており、前者ではよくみると日本の茅葺もしくは藁葺の家屋の中に髷を結った人物も描かれています。これらの剥落小破片も分析させていただいたところ、技術的には典型的な日本の蒔絵技法で作成された漆層からもチチオールのみが検出されました。その一方で、国産漆塗料のみで作成された南蛮漆器もありました。このことは、東南アジア産の漆塗料を平戸・長崎に輸入して、瀬戸内海を経て大坂、さらには京都の蒔絵工房に搬入する。この蒔絵工房では、輸入漆塗料も併用しつつ輸出向けの規格品の南蛮漆器をシステマテックに生産する。その上で、こんどはこれを平戸・長崎を経由して海外に輸出される。まさに、我々日本の物づくり DNA 精神は、決して高度経済成長期以降に初めて出現したのではなくではなく、すでに桃山文化期にはジャパン＝漆、その漆文化のなかで息づいていた可能性が指摘されるのです。

これは、文化の受け入れ＝異文化理解のモデルケースの一つとして、考古資料、とりわけ漆器を代弁者としてこの分析調査を行った一事例です。いずれにしても東南アジア～日本～ヨーロッパを通じた非常にグローバルな社会の動きがすでに桃山文化期には存在しており、その中に漆塗料～漆器という什器が商業ベースでも組み込まれているというでしょうか。物の動きは当然、移民ということでも考えられます。人の移動と物の移動の連動性ですね。和人地～北海道～アムール川中・下流域のヒトとモノの動きの解明は、まさに本日の小シンポジウムがテーマとする中・近世アイヌ社会の解明そのものです。そのなかで、「中・近世アイヌ史の解明に対する漆器分析の可能性」は将来あるのかといわれると、私は必ずある、とお答えしたいと思います。具体的な実証は、一つはアイヌ社会における高台寺蒔絵を含む桃山文化期の漆器の位置づけ、その後の江戸文化期における場所請け制度とアイヌ椀との関連性、さらには山丹交易ルート上の輸出漆器と人自体の移住に伴う漆器の移動の実体解明などが、近世では主なテーマとい

えそうです。さらに、中世期の内容については、まずは日本海ルート上のヒト・モノ・富・情報と、太平洋ルート上のヒト・モノ・富・情報のそれぞれの状況を対比させつ実体解明に向け、その代弁者の一つとして出土漆器を取り上げて調査する。その意義は、やはり有望であると思います。本日は、ちっとも具体的な内容に迫れず大変失礼しました。これからの私の課題としたく存じます。本日はありがとうございました。

参考文献

北野信彦（２００５）『近世出土漆器の研究』吉川弘文館、

北野信彦（２００５）『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣

北野信彦編（２０１２）『桃山文化期における漆文化の実態に関する文化財科学的研究　―南蛮様式の初期輸出漆器の生産体制と生産技術に関する基礎的調査―』東京文化財研究所